私と加曽利貝塚と後藤和民さん

堀越　正行

私が明治大学文学部史学地理学科考古学専攻に入学したのが 1966年４月、後藤和民さんが明治大学大学院文学研究科史学専攻考古学専修修士課程を修了したのが同年３月であるから、後藤さんとは大学ではすれ違いであった。入学して直ぐの４月下旬に考古学研究部の新入生歓迎行事として千葉市の貝塚見学会が実施され、生まれてはじめて行った貝塚が加曽利貝塚であった。埋め戻し跡の生々しい南貝塚と灌木の茂る北貝塚、両貝塚の間では博物館の建設が進められていた。そのあと西千葉駅からバスに乗り、当時はまだ一面の畑だった犢橋貝塚を訪ねた。貝で真っ白な畑！。共に大規模な貝塚であり、何もわからない初心者には大いに刺激的な貝塚巡検であった。また６月19日、専攻１年生の春季考古学実習で千葉市内貝塚巡検があり、駿河台から大型バス１台で巡るハードな日程で、六通貝塚・誉田高田貝塚・辺田ノ台貝塚・月之木貝塚を経て最後に加曽利貝塚を訪れた。誉田高田貝塚に登る坂道には、滑り止め用と思われる夥しい縄文土器片が敷かれていたのには驚いた。加曽利貝塚の到着時刻は予定を超過し、午後４時を回っていた。そして引率の杉原荘介先生から君たちの先輩だとして後藤さんが紹介され、何も知らない私たちヒヨコたちに加曽利貝塚の説明をしてくれたのである。初対面の後藤さんの、その熱っぽい語りに圧倒されたことを覚えている。話が興に入って口元に泡を貯めるのは、私の知る限り後にも先にも杉原先生と後藤さんのみである。口角泡を飛ばすのは、熱血漢であることの証左であろう。

後藤さんは、大学院を修了して直ぐに千葉市役所に奉職し、建設中の加曽利貝塚博物館の展示を任されていた。６月は、北貝塚の貝層断面の発掘調査が実施されていたから、私たちの実習の日程は貝層を見学できるよう、これに合わせて設定されたに違いない。そこは“切通し”と通称されていた、今日では“貝層断面観覧施設”と呼ばれている地点で、発掘は先輩たちが担当していた。その眩いばかりの真っ白で厚い貝層を恐る恐る見入ったのであるが、すでにこのとき、私は貝塚から、そして加曽利貝塚から抜け出せない運命にあったのである。翌1967年11月から12月にかけて、今度は“切通し”に覆屋を設けるため、両脇の壁となる部分のトレンチ調査が行われた。野帳の記録によると、私が参加したのは11月21日から12月１日までの２期で、場所は南側の壁になる部分の２m幅のＢトレンチである。厚さが２m近くもあるのは、中期の中央窪地型貝塚としては他に例をみないものであり、特異な貝塚であることは間違いない。ただ貝殻だけでなく、とりわけ貝刃が目立って多かったことは特筆される。これは、貝殻だけを捨てていたわけではないことを意味すると理解したのである。すでに博物館は１年前に開館していたから、作業の始業・昼休み・終業は博物館に行くことになる。私の参加した期間は、後藤さんは発掘には出なかったと思う。おそらく博物館の活動を軌道に乗せるために腐心し、発掘に出る余裕はなかったのであろう。

12月16・17日に実施された専攻２年秋の実習は草刈場貝塚の地形測量であったが、その直前には博物館の研究活動の一環として菱名貝塚の測量調査が計画され、これに参加した。小じんまりした中期の中央窪地型馬蹄形貝塚である。しかし、測量調査の後で実施された菱名貝塚の試掘調査については、実習のため参加できなかった。そのときの図と発掘の内容については、紀要第２号で紹介されている。明けて1968

年３月、今度は荒屋敷貝塚の測量調査が博物館の活動として実施された。「貝塚トンネル」などない、旧地形を留めていたときであった。双方とも私は平板を受け持っていたので、時々様子を見にきた後藤さんから測量の指示を受けたのである。かくして、ようやくその他大勢の部類から脱し、後藤さんから晴れて堀越として識別されるようになったのである。“切通し”と“第１住居跡群調査区”に覆屋が完成したので、４月13日から19日まで、今度は双方の貝層の再実測と斜めの削り発掘、そして東京文化財研究所の登石・樋口両先生の指導をうけながらアクリルエマルジョンという薬材の塗付作業を行った。１年生のときにはじめて見た貝層を、今度は自分の手で斜めに削るように掘り進めた瞬間である。貝塚の貝層の固定は、静岡県の蜆塚貝塚に次ぐ２例目でまだ試行段階ではあったが、現地で実物によって展示し、見学者が直接に観察・学習できるようにするという、後藤さんの熱き思いの実現にお手伝いできたのは幸いであった。

３年から校舎は駿河台本校となり、考古学研究部も和泉支部から駿河台の本部に移ることになるが、私は研究部の部長になるはめになった。前々から何回かアプローチしていた千葉市東南部地域の貝塚の分布調査が活動の柱のひとつになったので、挨拶と協力依頼のため博物館に後藤さんを訪ねると、当該地域は大規模な開発が予定されており、経費は持つから遺跡の分布調査をやってくれないかという話になった。この件を部に持ち帰って諮ると、縄文時代の遺跡を主とし、それ以外は可視あるいは聞き込みしうる限りの探索という条件付きで皆の賛同が得られた。かくして総勢14名が、７月26日から８月２日までの間、院内町の千葉市社会センターを宿舎として、バスを利用して遺跡踏査に出かけた。千葉市東南部ニュータウンと呼ばれる地域がそれである。当時はまだ昔のままの田園風景の広がる土地であり、恐らく1881(明治14)年に加部巌夫がこの地域の貝塚を探査したころとほとんど変わらない風景であったと思われるが、夏ということに加えてプロパンガスに移行して林が荒れ放題になっていたということもあり、上赤塚貝塚はブッシュがすごく立ち入りを断念せざるを得ないなど、調査は難航した。

踏査中に加曽利貝塚の後藤さんに電話連絡したのは、六通貝塚で土器片層と人骨が露出していることと、野田小谷貝塚と思われる小貝塚を再発見したときである。六通貝塚の方は、もとは防空壕だったという円形の穴で、天上は落とされていた。入口からスロープを降りると、数拾cmはある土器片の層がぐるりと巡り、その土器片層の下にはローム層を掘り込んだ穴の断面が１つあり、ヒトの脚と思われる骨が露出していたのである。後藤さん・庄司さんが到着し、地主さんの了解が得られたので、応急調査を実施することになった。道具がろくに揃っていなかったが、まずクリノメーター・水糸・コンベックス・方眼紙という最低限の道具を駆使してセクションを簡易実測してから一部を発掘した。土器片層は大量の加曽利Ｂ式土器片と完形の小型土器からなり、人骨は加曽利ＥⅡ式土器を伴う貯蔵穴に埋葬したものと想定された。宅地内ということで、それまで人目に触れなかったのであろう。また聞き込み調査の際、鎌取町の個人宅で主理台貝塚で拾ったという片側にアグが２つある鹿角製尖頭器の寄贈を受けたが、これも博物館に展示されている。遺跡名の適否も検討事項であったが、それまで生浜台貝塚とか南生実台貝塚と呼称されていた貝塚は、南生実町森台であることがわかり、森台貝塚の呼称が適切と指摘した。この森台貝塚で思い出すのは、明徳学園内の40m近い前方後円墳を検分したあと、西方の坂を下りながら森台貝塚へ向かう途上、大きな古墳と思われる高まりを認めたが、時間が迫っていたため踏査することなく森台貝塚へと直行したことがあった。そのままにしていたところ、じきに生実町で前期古墳新発見というニュースがあり、私は「あれだ！」と直感した。大覚寺山古墳である。労を惜しんで放置したことを反省している。

調査票や採集遺物、ガリ版刷りの「千葉市南部遺跡分布調査概報(実施者報告)」など一式を提出し、一

応の区切りをつけたのは11月下旬のことであるが、分布調査の終了と実施者報告までの間、“貝層断面観覧施設”と“竪穴住居跡群観覧施設”の照明や空調に必要な電気を通電させるためのケーブルの埋設が計画され、それに先行して発掘調査が実施されることになり、８月16日の開始から９月21日の終了まで私たち研究部員が主力メンバーとして参加した。幅１m、長さ290mという長大なトレンチが北貝塚に入れられたのである。私が発見した埋葬人骨は保存状態が良好であったので、後半は後藤さん自らが発掘し、最後は博物館の展示用にこれを切り取った。その少し西側では、今井さんがこれも博物館に展示されている埋葬家犬骨を発掘していた。天下の加曽利貝塚ではあるが、遠い過去からの栄光を背負った遺跡ほど出土品は中央に持ち出され、地元には発掘壕しか残されていないという実態を知る人は少ない。すべて博物館で保管しているものだと思っているから、その少ない展示物にどうしても強いインパクトを得られず、もやもやとした気分で退館することになる。その点、埋葬人骨や埋葬家犬骨は、いかにも貝塚らしい展示物であり、それも歴とした加曽利貝塚の資料であるから、インパクトの弱さを補うに十分な成果であった。

この人骨の時期について問われて説明したとき、後藤さんから「それは間違いないね」と念を押されたことを覚えている。掘った人しかわからない肝心なことを直ぐに聞き出し、納得を得ていたのである。隣りの発掘区の層がうまく接合しない無謀な調査がまま見られる中で、日本一長い？セクション図が接合したのはいうまでもない。何事も後藤さんから「これはおかしい」と指摘を受けないよう努力したつもりだが、それは後藤さんから育てられたことに通じるのである。この博物館で展示されている４区１号人骨が発見された現地の真上の位置には、ケーブルの配電盤が設置されている。正門から博物館に向かう園路が、博物館に入るために下る坂道の手前右側の道路脇に、その配電盤はあたかも記念碑のようにひっそりと立っている。配電盤を見て佇む不審な人物の素情は、そう遠くない過去を知る生証人であったのである。かくして私は、加曽利北貝塚第３調査区と第４調査区という北貝塚本体の最後の発掘に、後藤さんとともに深く関わったことになる。

1972年、私は大学院修士課程を修了して直ぐに市川市に就職した。堀之内貝塚の隣地に新設された博物館の学芸員としてである。後藤さんと同業になったのである。秋の開館を目指し展示の準備をしていたところ、縄文人の生活の一コマをジオラマで再現するにあたり、接合痕があったり石膏が入れられたりした本物の土器は使えないことに気付き、予算もないことから自ら作ることにした。後藤さんに頼みこみ、加曽利貝塚博物館でやっている土器づくりに参加させてもらい、展示用の土器をつくらせてもらうことになった。失敗の許されない一発勝負のはじめての土器づくりではあったが、何とか出来上がると、後藤さんから「うまいね」とお褒めの言葉をいただいた。モデルは加曽利の土器とはいかないので、施文が楽な市川市曽谷貝塚出土の称名寺式土器の写真を見ながらつくった。この私のつくった記念すべき第１号の土器は、今で

1973 年 1 月 25 日の明治大学考古学研究室創設 23 周年記念日・杉原教授還暦記念祝賀会。研究室関係者と千葉・市川の学芸員が出席した

も市川の考古博物館のジオラマ中央に鎮座している。ただせっかく無傷で完成したのに、千葉駅の階段に土器をぶつけ、少しヒビが入ってしまったのが玉に瑕である。後日、このときの経験をもとに市川の博物館でも土器づくりをするようになったが、市川の土器づくりは加曽利貝塚博物館を家元とする加曽利流の土器づくりであるといえる。私の初作がうまくいったのは、すでに新井さん・後藤さんたちが日夜土器づくりに格闘していた経過があったからであり、粘土と混合物の配合が良かったことに尽きる。土器づくりというのはそう簡単にはいかないものだということを、私は後で思い知らされることになる。

1973年、後藤さんは雄山閣から刊行された『房総地方史の研究』で、「縄文時代における東京湾沿岸の貝塚文化について」という論文を発表した。これは後藤さんが予てより主張していた“大型貝塚干貝加工場説”を広く知らしめた原典であり、一世を風靡した。発表当時から賛否交々であったが、それから15年後の1988年3月27日、加曽利貝塚保存25周年記念講演会が文全協と千葉市の遺跡を守る会の主催で千葉県教育会館で開かれた。私には「加曽利貝塚と縄文時代の生活」というテーマが宛がわれ、私は干貝生産を全否定しない立場であるが、そこで「私は加曽利貝塚は貝塚を伴う集落遺跡であると考える」ということを述べたのである。後藤さんの面前でその説に異を唱えたことになるけれども、後藤さんは至って平静であった。異論はそれとして自分の信念は別にある、というところなのであろう。

後藤さんは勉強家であり、努力家であり、情熱家である。通説を疑い、これを資料をもとに論破し、持論を展開する。考古学の(＋恐らく役所の？)既成の常識なるドグマへの挑戦を続けた人でもある。1985年に策定された「千葉市史跡整備基本計画」は、年来の「基本構想」を纏め上げ具体化したものであるが、後藤さんが中心となって心血を注いだ計画に違いない。ただ計画は余りにも壮大過ぎて着手に躊躇され、四半世紀が過ぎた今でも眠ったままになってしまったのではないかと私は勝手に想像している。その実現を見ずに退職し、そして鬼籍に入ってしまったのであるから、さぞかし無念であったろう。後藤さんは、夢を大きく描けるロマンチストでもあったのである。

後藤さんと最後にご一緒したのが、再び千葉県教育会館で開催された2009年3月14日の加曽利貝塚博物館友の会主催による“シンポジウム千葉の縄文貝塚に学ぶ”であった。折からの嵐で電車は止まってしまったのに、どうやって辿り着いたのか不思議なほど会場は満員であった。久しぶりに後藤さんの講演があるからだと思う。創価大学の教え子が多数出席していたのも、先生として学生から慕われていた証しであろう。予め熱弁が予想されたので、私は自分の持ち時間を半分に切り上げ、残りの時間を後藤さんの「加曽利貝塚はどう守られたのか」に譲った。案の常、それでも時間は足りなかったが、恐らくこれがお元気なときの最後の熱弁だと思う。写真は杉田秀一さんから頂いたそのときの1枚である。夢を追い続けた万年青年であった後藤さんは、常に加曽利貝塚の上空に在って、好きなウキスキーを飲みながら、北極星ではないのに動かずに加曽利を見守っているのであろう。

“シンポジウム千葉の縄文貝塚に学ぶ”の討議風景

(元市立市川考古博物館 館長)